

名誉会員佐藤順一氏の逝去



本会名誉会員佐藤順一氏は昭和45年(1970)4月26日夜11時、脳軟化症により逝去された。享年97才。

佐藤順一(以下敬称略)は明治5年(1872)10月25日、福岡県山門郡城内村大字新外町63番地に生れた。父佐藤善六は柳川藩の立花氏につかえ、同藩の剣道指南役であった。

明治26年(1893)、佐藤は大分県尋常中学校卒業後、笈を負うて上京し、神田小川町にあった私立東京物理学校に入学した。当時、同校は修業年限3か年で、6学期制であったが、佐藤は明治29年(1896)6月第5学期を修了している。同校の卒業者名簿には氏の名はみられない。

佐藤は明治30年(1897)5月に、大分測候所の技手として採用されたが、これが氏の気象界への第一歩であった。明治33年11月、当時29才であった佐藤は眼科医の二女福原とも——現在88才で健在——と結婚し、後に二男二女をもうけた。

明治34年(1901)6月、大分測候所を退職、この翌月、山階宮菊麿王創立の山階宮気象観測所(筑波山)の所長となったが、当時山頂における観測を囑託されたのは、佐藤のほか美添鉦一・筒井百平であった。明治36年

10月、佐藤は最初の論文“地中温度の観測について”を気象集誌に発表した。これは筑波山観測所において鉄管と木筒を用いた場合の地中温度の差異をドイツ製のフース寒暖計を用い、精密に比較したものであった。

明治40年(1907)1月、佐藤は寒中の富士登山に成功した。この翌年5月、佐藤の支持者であった山階宮は他界し、山階宮による富士山頂観測の計画は頓座した。明治42年(1909)4月、筑波山の山階宮気象観測所は中央気象台へ寄贈され、新たに中央気象台付属の筑波山測候所となったが、その時佐藤は同所員の山口盈と共に中央気象台技手に任せられ、筑波山測候所長となった。そして同所長として大正9年(1920)8月まで20年間在任した。

明治45年4月、佐藤は“多年気象事業に従事シ本邦気象界ニ貢献スル所尠カラズ”という理由で大日本気象学会から銅牌をうけた。彼が中村、和田等の大先輩と共に花房会頭から賞牌をうけたのは、筑波山における高山観測のほか、すでにその時まで集誌に26編の論文を発表しており、また煙花で打上げた吊風船や水素気球の観測によって高層観測において先駆者的業績をあげておられたこと等によるものであろう。佐藤の業績は大体、明治時代に方向づけられたとみるべきであるが、そのうち特に重要なものは次の三つである。

第一は明治39年(1906)10月の集誌に掲載された“高層の気圧を推算して私見を述ぶ”という論文である。これは地上の気圧・気温から上層の気圧を推算し、その年変化・日変化をしらべたもので、荒川によると“この論文はその後の日本気象学会に深甚な影響を与えた”。後に藤原・関口両博士によって推算三千米等圧線を天気予報に利用することが論ぜられたが(1919)、佐藤の業績はこれに先立つこと13年である。

第二は明治40年(1907)1月、同じく気象集誌に発表された“日本の高山観測”という35ページに達する大論文である。この論文はせまい気象学の分野をこえて、日本の探検史において画期的なものであるが、その理由は19世紀的な単なる冒険としてではなく、はっきりとした自覚をもって、探検を科学的な調査事業と考えた点にある。佐藤はこの考えを空論に終らせず、昭和に入ってから富士山における気象観測の開始に生かした。

第三は高層風観測についての先駆的な業績であるが、

名誉会員佐藤順一氏の逝去

これについては明治45年4月第9回気象協議会で行なった報告が、“気流の観測に就て”と題し、気象集誌31年7号(明45年7月)に掲載されている。

佐藤の業績としては昭和初頭に行なった富士山の越冬観測が、新田次郎の小説“凍傷”(1955)等を通じ、もっとも広く知られているが、上述した明治末年までの業績と、昭和初年の仕事を一時中断するような形で、北樺太の気象観測が氏の経歴にあげられることになる。

大正9年(1920)2月に尼港事件がおこったが、日本政府は同年7月から事件解決まで北樺太を保障占領した。その占領は大正14年5月までつづけられた。大正9年8月、佐藤は気象台技師に任ぜられ、筑波山の所長をやめて中央気象台在勤を命ぜられたが、同年9月薩哈噠軍政部付を命ぜられ、八木常吉、布村重次郎と共に小樽を出港して、北樺太のアレキサンドロフスクに向った。北樺太在任中の業績は“北樺太の気象”(1925、大阪毎日新聞社編纂：北樺太一探検隊報告一所収 p. 237-306)にまとめられており、この中で日出没時の異常屈折を解説した第3章は美しい色彩つきのスケッチが挿入されていて特に興味深い。

大正15年(1926)7月、佐藤は中央気象台における気象調査事務を囑託されたが、同年4月の大日本気象学会の総会においては中野広、国富信一、佐木虎士、筑地宜雄と共に学会の幹事になった。以後佐藤は昭和28年(1953)12月まで27年間、学会の役員(幹事、後に理事となる)をつとめた。佐藤は学会に対しての永年にわたるこの貢献によって、昭和41年5月、日本気象学会の最初の名誉会員にあげられた。

富士山頂における越冬観測は、明治28年(1895)の野中到の観測以来、不可能とされていたが、この観測に再度とりかかったのは佐藤であった。彼は昭和2年(1927)12月、若い技手3人をつれて登頂を試みたが、この時は暴風雪のため失敗した。昭和5年(1930)1月、強力の梶房吉ひとりをつれて富士山頂に向った。途中八合目で

滑落し、手と足に怪我をしたが、梶に助けられて山頂にたどりつき、そこで冬季観測をはじめた。脚気や凍傷になやまされながら予定通り1カ月の観測をすませ、2月7日下山した。下山のとき吹雪にあい、両足に凍傷を負ったが、文部省への報告にはこのことにはふれず、装具さえ十分ならば、59才の自分でも平地と全く同様に観測することのできることを述べた。これがきっかけとなり野中到の観測以来、危険とされていた越冬観測が不可能であるという迷信はやぶられた。昭和6年12月には富士山観測所の予算が認められ、翌年には山頂観測所の建物も完成し、世界でも有数な高山における観測は現在もおつづけられているのである。

昭和16年12月、すでに70才に達していた佐藤は中央気象台統計課の雨量掛長に命ぜられた。その後、図書課にうつり、一時再び統計課に勤務されたこともあったが、昭和24年(1949)8月退職された時は調査部図書課の事務員であった。退職後は気象学会の事務に専念されたが、昭和29年より38年頃までは気象庁岡田研究室で連日元気な姿を拝見することができた。役所に出られなくなってからは杉並区高円寺の自宅で悠々自適の生活を送られていたとき。昭和41年(1966)4月には長年の功績により勲四等に叙せられ、旭日小綬章が授けられた。また、昭和44年(1969)5月、東大生産研において日本科学史学会の年総会の開かれた折、筆者(根本)は日本の探検史における佐藤順一の業績の意義について発表したが、当日佐藤は96才の高令にもかかわらず長女波子につきそわれて出席し、みづから30分程度、元気なお声で筑波山で観測を開始された当時の回顧談をされた。おそらくこれが佐藤の公の席における最後の発表であったと思われる。

佐藤の戒名は高照院富嶽良順居士である。墓所は都立の小平霊園に予定されていると聴く。

(1970 V-17 根本 順吉)